

P 1 FRONT LINE
●対談●
人・車・都市、そして文化
竹山聖 VS コリーヌ・ブレ



P 5 VISION
耐震技術と都市防災

P 7 NEW LINEUP
●立体駐車設備／新製品紹介●
「NELパーキング」

P 9 ARRANGEMENT
●立体駐車設備／導入事例●

かながわ労働プラザ(Lプラザ)
住吉館・毛利館(ツインタワー住利)

P 11 PERSON
●インタビュー●
野口悠紀雄
時代の転換期に現われた「超」の教祖

P 12 FROM OUTSIDE
建築「CD-ROM」の世界

P 13 USER'S VOICE
(株)西出自動車工作所第二本社ビル
(株)高木ビル

P 14 ANOTHER PROJECT
●他事業紹介／展示造形本部●
上高津貝塚ふるさと歴史の広場
「土浦市立考古資料館」

PHOTOGRAPH VERIAG・PPS (表紙) / 松岡茂樹 (P1-4) / 毎日新聞社 情報データベースセンター (P6) / エス・エス横浜 (P9)、三輪寛久 写真研究所 (P10)、土肥裕司 (P9-10) / フォーカシステムズ (P12-13) / 土肥裕司 (P13) / スタジオ・スペース (表4)

制作協力 (株)日本廣業社 (株)東京ネットワーク・ビューロー

デザイン 江崎デザイン事務所 印刷 (株)総研

車を優先する社会には機械式駐車場など要らない
逆に、人間を優先する都市にこそ
それは仕方なく必要となる
竹山 聖

建築家として世界中の都市を尋ね歩き、地球規模の活動を展開する竹山聖氏と報道番組でもお馴染みの論客コリーヌ・ブレ氏。仕事柄顔を合わせる機会も多いというお2人による対談は、都市を起点に次第に機械式駐車場の話題へと及び、談話風発のときが流れた。

コリーヌ マルチメディア時代になって、家でも、あるいはどこか別の場所でもコンピュータさえあれば仕事ができるという状況になってくると、もう街にかけられる必要がなくなるような気がします。それに、たとえば子供が生まれると、その子のために庭が欲しいとか、もう少し自然に近いリズムの中で暮らしたいなど……。私は、だんだん都心から人が離れるという動きを感じるのですが。竹山 都市がこれからどう生き延びるかというのは、重要な問題だね。でも、その前にまず「都市に我々は何を求めようか」ということをちゃんと考えないと。たとえば、ニュータウンというのは、まず大抵ショッピングセンターがあって、店舗よりも広い駐車場が必ず付いていて、住んでいる人はみんな車を持っていて、家は庭付一戸建て。そういうのがズットと広がっている。しかし、そういう街というのは必ず車で移動するところだから、人が歩いて楽しむ街ではない。今日のテーマに絡めて言えば、機械式駐車場なんて必要のない場所。一方、都市が魅力的で、僕らがそこに住みたいと思つたときには、それが必要となってくる。機械式駐車場というものがものすごくメリットをもつてくる。そして、僕自身について言えば、これから「都市の真ん中に住む」というような形で都市を守り育てる方向でいかなないとダメだと思う。なにしろ通信ネットワークがどんどん発達すると、もうどこからだって一応は言葉や記号のレベルではコミュニケーションができるんだから。だけど、僕らが都市に求めて

いるのはそんな手段じゃない。それよりもっと直接的なネットワークやコミュニケーション。それが無ければおそろく、僕らが都市に住む意味もない。コリーヌ 確かにそうね。都市を離れて一番不足するのは、やはりそういったコミュニケーション。人と会ったり、美術館に行ったり、映画や演劇を観たり……。観劇では休憩時間も大事な時間だし。でも、日本人はそれほど行かないみたいですね。パリの人はみんなよくかけるんですけど。とにかく人と会って、刺激し合うみたいなのをいつも求めています。そういった場所というのは広場みたいなものだから、そこに行けば何かに出逢えるというような。でも東京では、そうした場も少なくなってきたように感じますね。竹山 そもそも日本はそういう場をもたなかったし。コリーヌ そうね、もともと無かったのかもしれませんが、そこでは話は変わりますが、私の目には、竹山さんのデザインした建物が祈りを込みに映るんです。何か、空を仰ぐような……。そして、そうしたイメージというのは、欧米人にとってはキリスト教的な感覚だと思っんです。それで以前からお聞きしたかったんですけど、クリスチャンなんですか？

竹山 誕生日は12月24日なんですけど、残念ながらそうじゃないですね(笑)。だけど、崇高性というふうなもの、それは人間が必ず求めるものだと思つています。機能が、美か、というレベルとは違った意味でね。そして哲学的な意味合いにおいても人間っておそらく、ある種の神秘的な感覚や崇高さ、聖なるもの……。そうして自分を超えた何かに、生きてフツと出逢う場面が誰にでもあるはずだと。また、そもそも建築というのは、そういうものを感ぜさせるための巨大なメディアでもあったわけですから。コリーヌ 聖なる空間に出逢うといえば、日本では東京の街でも意外なところにポツンとそうした空間がつくられているでしょ。たとえば、お地藏さんや神社の小さな祠、それに大きな木にしめ縄が巻いてあったりと。実は私、それがとても魅力的だったんです。竹山 僕は、自分の建物にそうした空間を埋め込みたいと思つているんです。誰でも入っていただけるけど、そこに入るとまったく別の、ある種の崇高さを感じさせるような場所を。僕自身はそれを「無為の時間を空間化する」と言っているんだけど、つまり Nothing to do。ヨーロッパでは、路はサロンの延長としてつくられたつまり、邸宅の前に広がる街並みや路にも屋敷の廊下につながる美しさを求めた コリーヌ・ブレ

[対談] 人・車・都市、そして文化
竹山 聖 vs コリーヌ・ブレ



半蔵門「同仁堂御膳蔵」にて



都市に求めるのは、ファーストハンドのコミュニケーション  
通信がいくら発達してもかなわない  
もっと身体的で、直接的なネットワーク



竹山 聖 (たけやま せい) 建築家・京都大学助教授

1954年生まれ。77年京都大学卒業後、東京大学大学院で原広司に師事し、82年博士課程修了。大学院在学中から世界各地の集落をめぐるなど、グローバルな活動を展開。79年には「設計組織アモルフ」設立。92年より現職。建築デザイン分野で数々の賞を受賞する人気建築家の一人であると同時に、さまざまなメディアでも幅広く活躍。もはやライフワークとなった都市の原形を辿る旅の一環として、現代都市ヴィジョンを構想し続ける。代表作に「OXY木坂」「D-HOTEL 大阪」「TERRAZZA青山」「BLUE-SCREEN HOUSE」「周東町パストラルホール」等々。作品集として「竹山聖 (六耀社)」「都市を呼吸する」(リプロボート)、CD-ROM「竹山聖/空の建築」(ハートランド)がある。

というか、空白の時間を感じさせ  
るための場所だったと思ってい  
る。もちろん、計画段階では「も  
っと入りやすくしてくださいよ」  
という意見も出た。広場だから：  
。だから理屈としてはその気持  
ちもわかる。誰でも入れる広場と  
いうのもいいかもしれない。パブ  
リックな場所というのは、基本的

には不特定多数に放たれた空間で  
あると、僕自身もそう思う。しか  
し僕はそこに、隙間が1メートル  
ぐらいしかないような3本の塔を  
立てた。その間をくぐって出る気  
分、ある種の無理を通ってきた人  
たちだけが味わえる自由な空間の  
方が、かえって価値があるんじゃないかと思っ  
た。もちろん塔にも

機能がありますから、建築計画上  
も無理な計画ではない。けれども  
「パブリックな場所をつくる」と  
いう意味においては、塔の隙間を  
くぐって入るわけですから、無理  
な計画(笑)。でも、僕はその方  
がいいと思っ  
た。もちろん塔にも  
機能がありますから、建築計画上  
も無理な計画ではない。けれども  
「パブリックな場所をつくる」と  
いう意味においては、塔の隙間を  
くぐって入るわけですから、無理  
な計画(笑)。でも、僕はその方  
がいいと思っ  
た。もちろん塔にも

利さだけではもうダメな時代にな  
ってきた。  
竹山 便利さだけでいくと、まず  
ます人が郊外に出て行ってしま  
うと思う。だって都市の真ん中と  
いうのは逆に不便になってきてい  
るでしょ。それにもう一つ言える  
ことは、ヨーロッパとアメリカで  
は、都市のもつ意味合いがものす  
ごく違うんだよね。ヨーロッパの  
場合は、クラスが上であればある  
ほど都市の真ん中に住んでいる。  
また彼らは、そうしたノウハウは  
伝統的につくり上げてきた。  
竹山 一方アメリカでは、そうい  
った人たちは都市の外側に住んで  
いる。真ん中はビジネスの場所  
であり、それからスラムがある場所  
である。だからある程度のグレ  
ードをもった人たちは皆、郊外の  
庭付一戸建てに住む。  
竹山 きれいな空気や自然と  
共に。  
竹山 そう、だから考え方がまっ  
たく違う。そして日本はね、アメ  
リカの都市づくりをすくく受け  
入れている。それからヨーロッパ  
的な街の魅力もよく知っている。  
だから今、その分水嶺に立たされ  
ていると思う。アメリカほど国土  
は広くないし、真の意味でのお金  
もない。しかし、ヨーロッパほど  
密集して都市に住むノウハウはま  
だないわけですよ。その意味では、

日本にとっては多分、コンビニ  
エントであるということが今まで  
は経済を進めてきた原動力であ  
り、これからは弱みでもあると思  
うんですよ。便利さを求めること  
で文明は進むけれど、文化は進ま  
ない。そろそろ我々も、不便であ  
ることの意味も含めた美の問題  
を、それから都市全体のアメニ  
ティについて考えていかなければと  
思います。  
竹山 その「不便」というキ  
ーワードですが、実は以前から、  
私もその言葉を意識しているん  
です。うまく言えないですけど、不  
便への衝突から生まれるひらめき  
というか、火のようなエネルギー、  
新しいものを創り出す可能性。つ  
まり創造にとつて、不便や無理は  
あった方がいい、むしろ必要な  
のだと。  
竹山 僕のデザインした建物に、  
たまたま日精のパーキングを使っ  
た「TERRAZZA」という建物が  
あるんだけど、それは地下をも  
のすくく深く掘って、地上にはパ  
ーキングを一切出さないようにし  
てつくったんです。敷地からい  
え、地上にパーキングスペースを  
取ることも可能でした。でも僕は  
車が表に出るのもあまりよくない  
なと思っ  
て、それで地下に埋めて、  
その代わりタワーを3本立てて、  
後ろに広場をつくったんですよ。  
それが僕にとつては、聖なる場所



「新半蔵門ビル」にて/ニッセイ・レベルパークNLPL3C-13FD (特大型車39台収容)

パーキングをつくる場合でも、何か  
都市にしかあり得ないような  
そんな「暮らし」を反映させていきたい



コリーヌ・ブレ (Corinne Bret) ジャーナリスト

モロッコ生まれ。フランス国籍。現在、東京在住。パリ大学法学部卒業後、1975年初来日。78年一旦パリに帰国、パリ東洋大学日本語科に入学。81年卒業。再来日後は、私「リベラシオン」紙の特約記者(82~91年)をはじめ、日本のさまざまな雑誌で執筆活動を展開。89~90年には月刊誌「STUDIO VOICE」の編集長として手腕を振るう。TV・ラジオ番組のコメントーターとしても知られ、また建築分野においては「東京建築デザイン会議」等の委員を務めるなど、多岐にわたる活動ぶりを見せる。著書に「造の国・ジャポン」(プロンス新社)、「赤ちゃん・ザ・革命人」(世界文化社)、「おへそを眺めながら」(筑摩書房)などがある。

そして僕自身も、人間を優先した  
い。人間が歩いて楽しい街をつ  
りたい。そういう街に、僕は住  
みたいから。  
コリーヌ なるほどね。  
竹山 それでも、車というのは文  
明の利器ですから、現実に僕らは、  
車で動くことによって生活の範囲  
をもっと広く広げることができ

た。劇場に行くにせよ、図書館や  
美術館に行くにせよ、あるいは何  
かまったく違ったアクティビティ  
に行くにせよ、車を利用して。た  
だし、僕は、建物同士が密接に  
つながり、街並みになつていてこ  
ろを歩いて移動したいと思うか  
ら、そうなる駐車場はその建物  
の地下なり、裏庭なりにつくる必

要が生じてきて、必然的に少々高  
いお金をかけても「機械式駐車場  
にしようか」ということになる。  
正直言ってコストはかかります。  
でも、その高い代償を払ってでも  
「都市空間は魅力的だ」と思わせ  
ないと。  
コリーヌ なるほど、とても明快  
によくわかりました。つまり、人  
間を選ぶ街づくりをしたいと思え  
ば、どうしても機械式駐車場が  
必要になってくる。確かにそのと  
おりですね。でも機械式駐車場と  
いえば、パリにも少しあるんです  
けど、日本のとは少し見た目が違  
いますよ。同じようにキューブミ  
たいな恰好ですが、壁に絵を描い  
たり、アートを取り入れたりする。  
日本ではコンクリートをボンと置  
いただけのようなのが多いよう  
ですけど。早い話、フランスでは  
たった一つの機能だけで生きてい  
る建物というのは許されないのね。  
何か付加価値を必ずつけなければ  
いけない。それは駐車場だけじゃ  
なく、ゴミ処理場でも同じ。機能  
性と美を一緒に結合しようよ。  
竹山 ところが日本では、便利な  
らばいい。機能的であれば、まず  
はいいよね。  
コリーヌ 日本は今までズツと、  
経済成長で忙しかったから笑。  
それで美や暮らしの方はあまり考  
える必要がなかったのでしょう。  
でも、これからは違うと思う。便

利さだけではもうダメな時代にな  
ってきた。  
竹山 便利さだけでいくと、まず  
ます人が郊外に出て行ってしま  
うと思う。だって都市の真ん中と  
いうのは逆に不便になってきてい  
るでしょ。それにもう一つ言える  
ことは、ヨーロッパとアメリカで  
は、都市のもつ意味合いがものす  
ごく違うんだよね。ヨーロッパの  
場合は、クラスが上であればある  
ほど都市の真ん中に住んでいる。  
また彼らは、そうしたノウハウは  
伝統的につくり上げてきた。  
竹山 一方アメリカでは、そうい  
った人たちは都市の外側に住んで  
いる。真ん中はビジネスの場所  
であり、それからスラムがある場所  
である。だからある程度のグレ  
ードをもった人たちは皆、郊外の  
庭付一戸建てに住む。  
竹山 きれいな空気や自然と  
共に。  
竹山 そう、だから考え方がまっ  
たく違う。そして日本はね、アメ  
リカの都市づくりをすくく受け  
入れている。それからヨーロッパ  
的な街の魅力もよく知っている。  
だから今、その分水嶺に立たされ  
ていると思う。アメリカほど国土  
は広くないし、真の意味でのお金  
もない。しかし、ヨーロッパほど  
密集して都市に住むノウハウはま  
だないわけですよ。その意味では、

日本人にとつては多分、コンビニ  
エントであるということが今まで  
は経済を進めてきた原動力であ  
り、これからは弱みでもあると思  
うんですよ。便利さを求めること  
で文明は進むけれど、文化は進ま  
ない。そろそろ我々も、不便であ  
ることの意味も含めた美の問題  
を、それから都市全体のアメニ  
ティについて考えていかなければと  
思います。  
竹山 その「不便」というキ  
ーワードですが、実は以前から、  
私もその言葉を意識しているん  
です。うまく言えないんですけど、不  
便への衝突から生まれるひらめき  
というか、火のようなエネルギー、  
新しいものを創り出す可能性。つ  
まり創造にとつて、不便や無理は  
あった方がいい、むしろ必要な  
のだと。  
竹山 僕のデザインした建物に、  
たまたま日精のパーキングを使っ  
た「TERRAZZA」という建物が  
あるんだけど、それは地下をも  
のすくく深く掘って、地上にはパ  
ーキングを一切出さないようにし  
てつくったんです。敷地からい  
え、地上にパーキングスペースを  
取ることも可能でした。でも僕は  
車が表に出るのもあまりよくない  
なと思っ  
て、それで地下に埋めて、  
その代わりタワーを3本立てて、  
後ろに広場をつくったんですよ。  
それが僕にとつては、聖なる場所

●竹山聖氏のCD-ROM「空の建築」をプレゼントいたします。P13をご参照ください。